

平成 20 年度 第 1 回地域会議議事概要

6 月 16 日、青森市内において、地域会議を開催しました。

この会議は、私共日本原燃(株)が地域の皆さまから信頼していただける企業となることを目指し、当社経営層が直接地域の皆さまのご意見やご指摘などをお伺いして、事業活動に活かしていくことを目的に開催させていただくものです。

(委員)

吉田 豊	様	弘前大学名誉教授(前学長)
芦野 英子	様	エッセイスト
菊池 としえ	様	六ヶ所村保健協力員協議会会長
北村 真夕美	様	(株)青森経営研究所代表取締役社長
平出 道雄	様	青森中央学院大学地域マネジメント研究所長
村井 正昌	様	六ヶ所村原子力等エネルギー政策懇話会 座長
武輪 俊彦	様	武輪水産(株) 代表取締役社長
上長根 浅吉	様	六ヶ所村商工会会長

【会議風景写真】



● 議題

「再処理工場しゅん工～操業開始に向けた、県民の皆さまへの理解獲得について」

● 議事

○当社社長の挨拶概要

開催に先立ちまして、一言、私のほうからお礼の挨拶を申し上げさせていただきます。

前回、昨年10／11に地域会議を開催させていただきました時には、まだ、アクティブ試験第4ステップの途中ということでありましたが、その後、今年2／14より、第5ステップに入らせていただいております。

なお、ガラス固化試験につきましては、当社はモックアップ試験（ガラス溶融炉に係る機能の確証を目的とした各種試験）、化学試験（放射性物質を取扱わず、模擬廃液による試験）等、段階を追って試験を実施してまいり、昨年11月より、実際に高レベル廃液を用いた試験に着手いたしております。

硫黄など微量成分の影響や廃液中の廃棄物濃度の影響など、模擬廃液と実際の高レベル廃液との差等により、‘安定した運転状態を維持すること’‘白金族元素の影響を考慮し、管理された運転状態を維持すること’ができなかったことから、昨年の12月より、一旦炉を止めて冷やし、堆積物の分析等を行い、また、模擬廃液を用いた試験と実績データとの照らし合わせ等を行い、大学の先生、メーカー、JAEAの関係者等、オールジャパン体制で、ガラス溶融炉の円滑な運転方法の検討に努めて参りました。

そして、その検討結果がようやく纏まり、後ほど中村の方からご説明させていただきますが、今月11日に報告書として提出し、先週13日に国の安全小委員会においてご審議いただいたところでございます。

また、本日は、品質保証の観点から、神田検討会が開催されております。これは、「せん断機の油圧装置の油漏れ」「IAEAの封印を毀損した件」、「ガラス溶融炉の排風機停止の件」こういった一連のトラブルの今後の対策等について、先生方のご審議を頂いているところでございます。

色々のご心配をおかけしておりますが、もう一度品質保証体制の充実、強化を図っているところで、そういった中で、操業に向けて体制を整えていきたいと考えております。

本日も、委員の皆さまから貴重なご意見を頂戴したいと考えております。何卒、よろしくお願いいたします。

● 各委員からのご意見等

○安全性、品質保証等について

- ・ 例えば、以前、皇太子等が青森にお見えになって、私達がお茶だしする機会があったが、何歩歩いて、何度のお湯を入れてといった具合に、何度も入念にリハーサルをした。これは、やはり青森県の威信をかけてやっているという訳であり、

封印毀損のような件についても、何度もリハーサルをする、あるいは、封印というものはどういう意味を持つものかといったことについてオペレーターの方々に教育が徹底されていることが必要ではないか。

- ・ 私は、以前より村の相談員的な仕事をさせていただいているが、原燃関連の事業が始まってからは、原燃の中で働く方々とも関わりを持たせてもらっている。作業員の方々は全国から集ってくるが、昔は、常に納期に追われて仕事をしている感があり、「仕事はどうか」と声をかけると、決まって皆「つらい」と答えていた。しかし、昨年10月、若い人に同じことを尋ねたとき、「仕事は楽ですが、中身について厳しさが求められる」とのこと。
色々な問題を踏まえ、こうなってきたのだなぁと実感した次第。今後とも、是非こういう体制を続けていって頂きたい。
- ・ 我々地元としては、早く操業して欲しい気持ちもあり、また、しっかりと確実な操業を迎えていただきたいという気持ちもある。安全については100%がゼロスタート、99%でなく100%で操業して欲しい。

○耐震安全性に係る広報

- ・ 地震の件について、以前、六ヶ所の施設建設工事を開始した当時における岩盤の写真等を見たことがある。そうした、岩盤が露出している写真や記録を示していくことが信頼を得る上で効果的ではないか。
- ・ 昨年、新潟で地震があったが、今落ち着きつつある中、柏崎の原子力施設の方々に体験談を話していただくようなことも効果的ではないか。
- ・ 活断層の話については、やはり地道に広報活動していくよりほかに手段はないのではないか。

○県民の方々への理解促進方策について

- ・ 耐震の問題、ガラス固化の問題等、こうしたことについて、理解された方が、家族や知り合いの集りなどで説明し、更に理解が広まっていくかどうかということがポイント。噛み砕いた説明が重要である。
- ・ 正しい言葉と、分かりやすい表現との二段構えで説明することが一番適切ではないか。例えば、ガラス固化体の製造に関して言えば、‘仮焼層(正しい言葉)’と、‘落し蓋(分かりやすい表現)’といった具合。
- ・ 難しい内容の話は、新聞に書かれていても難しい。だから、みんな記事は読まずに、見出しだけ見るといった流れになる。地域会議の場で何度も出た話だが、やはりマスコミの方にキチンと理解いただくことが必要で、まずマスコミの方に分かりやすく説明することが必要ではないか。
- ・ 原燃関係の文章は、専門用語や横文字が多く使われており理解しにくい。極端な話、漫画でもいいから、子供にも安全性が理解できるような工夫もしていただき

たい。

- ・ 難しい専門の内容は、どうしてもわからない部分がでてくるので、最後は「説明してくれている方が、信頼できるかどうか」ということが重要になってくる。
- ・ 原子力に全然関心の無かった六ヶ所村出身で東京に就職した若い人の話だが、東京から親に「こういう本が書店でならんでいるよ」と坂本龍一氏が書いた‘ロッカショ(講談社)’の本を送ってきた。私も内容を見て、六ヶ所のトマトが食べられないというような話がかかれており愕然とした。

若い人たちは、ファッションで入る。数字ではなく感性で入るようだ。

今の人は「落し蓋」と言ってもわからない。ライフスタイルに合わせて、表現方法も変えなければならないのではないかと。

- ・ 経済界といったある程度の知識人に対しては、経済効果のような話と絡めて理解を求めていくことが効果的ではないか。また、大学の講義のような場における説明のレベル、一番層の厚い大衆のレベル、といったように各層に応じた理解促進のアプローチが必要。
- ・ 以前、原子力船むつがやってきたとき、私も騒動中、「魚が食べられなくなる。大変だ」と思った。その後、原子燃料サイクル事業等に関連し、茶話会形式の勉強会を通じて原子力のことを勉強していくうちに、徐々に誤解が解けていった。当時を振り返れば「知らないことは怖いことだ」とつくづく思う。皆さんの事業について理解を深めていく上では、小さな茶話会形式での勉強会が効果的ではないか。偉い方に説明にきていただかなくとも、むしろ親近感の持てる方が望ましい。そうした小さな勉強会を是非推進していただきたい。
- ・ 私は食品関係の仕事に携わっているが、安全性の保証について「性悪説」という観点からの説明が必要な場合も出てくる。つまり餃子の食品工場の様な話もあり、人為的ミスではなく、従業員が悪意をもって・・・という仮定も踏まえての説明。原子力関係についても、悪意をもってしても・・・といった観点から説明していけば、分かりやすい説明に繋がる場合もあるのではないかと。

○その他

- ・ 原子燃料サイクルを確立していくプロセスにおいて、今は、基本的にCO₂削減という大きなフォローの風が吹いている。また、青森県庁から、平成18年度の青森県のGDPが発表されたが、5年間ずっとマイナス成長であったのが、18年度に大きく躍進。これは原子力関連分野の影響に他ならない。日本原燃の再処理工場が本格操業を迎えると更に拍車がかかる。大きな流れの中、自信をもって事業を進められたい。

以上